

泉佐野丘陵緑地フォーラム

日時：平成 24 年 2 月 4 日（土）14:00～16:30 場所：りそな銀行大阪本社ビル 地下 2 階講堂

○挨拶

小河 保之(大阪府副知事)

- ・泉佐野丘陵緑地は、泉佐野丘陵コスモポリスをつくろうと用地を買ったが、バブルが弾けて大阪の負の遺産になった。
- ・この土地の活用方法として、公園にすることが決まったが、当時、財源がないという課題を抱えており、いろんな先生に知恵を頂き、この公園では他の公園と違うことをしようと、企業グループ「大輪会」のご支援やパーククラブの皆様にご協力いただき、現状の形になった。泉佐野丘陵緑地は、皆様の力でじっくりと育てていきたいと思う。

○基調講演

「新しい公共、泉佐野丘陵緑地での挑戦」 増田 昇 氏（大阪府立大学大学院教授）

- ・新しい公園のつくり方というのをみんなで模索しようとスタートとしたというのがこの公園。
- ・公園の特徴は4つ。①どう風景を再構成していくのかという景観を重視すること。
 - ②自然にも優しく、人間にも優しくという、環境に配慮すること。
 - ③みんなでシナリオのような物を作って考えながら作っていく、あるいは作る段階からみんなが参画できるという、シナリオ型の公園づくり。
 - ④公園を媒介として泉佐野全体が、あるいは、大阪府全体が活性化していくこと。
- ・公園は西、中、東に分かれていて、中地区には、公園利用時の最低限のハードとして、駐車場やパークセンターなどを整備するエリアを設定（こういった施設整備は府が展開）。もう一つは、コラボレーション区域という大輪会の支援を受けながら、府民と行政とが手づくりで公園をつくっていくエリアを設定。
- ・来年度に向かって、まさに今までの公共事業にはない形、産官学民が議論しながら、つくる段階から協力し、作り上げてからも作り続けていくという、新たな挑戦をしている。

○事例紹介 1

「みんなでつくろう！公園の新しい「かたち」 ～泉佐野丘陵緑地公園事業の紹介～」 窪田 誠 氏(大阪府岸和田土木事務所 所長)

- ・リーディング区域では、園路などインフラ施設の整備をしており、林の駐車場はアスファルトではなく、芝生舗装にするなど景観に配慮している。拠点施設となるパークセンターは、現在運営会議にて検討中で、デザインは、泉佐野市に古くからある農家の佇まいをイメージしている。
- ・コラボレーション区域では、水辺の落ち着きある空間で、多彩な水辺風景を楽しむことができ、ササユリが、6 月くらいには花を咲かせる。
- ・企業グループ大輪会(現在 53 の企業で構成)からの支援については、されており、泉佐野丘陵緑地にはじまる新たな公園づくりの趣旨にご賛同を頂き、大阪府と事業支援に関する確認書を締結し、概ね 10 年の間に 2 億円相当の資材等を提供して頂いている。



○事例紹介 2

「パーククラブ活動状況について:郷の便り」殿元 日出夫 氏（泉佐野丘陵緑地パーククラブ 会長）

- ・パーククラブ活動の活動方針は、「月1回以上参加しよう」「情報の共有をしよう」「明るく楽しく安全第一に活動しよう」
- ・活動内容として、公園の整備作業:20%、各種調査:23% 会議等:33%、イベント等:24%
- ・今後のテーマとしては、3期生との融合、専門部会の立ち上げ、NPO 法人化に向けての検討、公園のゾーニングのさらなる検討など。
- ・現在のゾーニング状況ですが、まだ分からないエリアがたくさんある。今後検討して、活用地区、保全地区、保存地区に区分していきたい。善行は報償を求めずという形をベースにし、「憩いと潤いある公園を残す」、「新しい仕組みのボランティア組織を残す」、「後世に伝える記録を残す」の 3 つですすめていく。

○パネルディスカッション

- ・「産官学民の協働」あるいは、「新しい公共」というのが一つのテーマになっている。最近、よく市民と行政の共生とか協働という言葉をよく聞くが、共生になっていこうとすると、お互いがお互いに機能、役割が違うということの違いを認め合わないと出来ない。パーククラブの運営も、共通の価値観に向かってお互いの違いを認めながら、いろんな役割をみんなが担っていくことが協働であると感じた。
- ・共生関係をしていく中で、お互い違いを認め合いながら、主従関係ではなくて対等な関係性、公平性をどう担保のすることが協働の広がり非常に高めていくということ。公平性を担保する仕組みとして、協議会、審査会、運営会議があり、お互いのフラットな関係のなかで議論できる形を展開していくということが重要。
- ・次の段階として、次にどう使いこなしていっていいのか、あるいは、どう活動を展開していっていいのかという点で、クリエイティブな発想が必要。いままでの都市公園法の中で規制的枠組みをとるとか、規制緩和がまさにそういうことで、規制緩和は秩序をなくすのではなく、いかにクリエイティブシンキング、いかに創造的な発想を高めていくかということが非常に重要。やってはいけないことを共有するのではなくて、やりたいことを共有して、やりたいことをいかに実現するのかを考えていきたい。
- ・成熟型社会の中で、今まで早いことや巨大な事が良い時代だったが、参加型の中での展開していく、あるいは自然にやさしく展開していこうとすると、時間という概念をきっちり踏まえながら展開していく必要がある。
- ・公園、緑地、環境というのは地域に根ざした環境資源であり、いかに地域との連携、あるいは関わりをどう深めていけるのかが重要。ここを展開することで、持続性をもった公園に展開し、地域に貢献できる公園になっていく。

泉佐野丘陵緑地フォーラム 記録



開会挨拶

- ・みなさんこんにちは、大阪副知事の小河でございます。
- ・今日は寒い中、泉佐野丘陵緑地フォーラムに多く集まって頂いてありがとうございます。また日頃は府政の推進にご理解支援いただいております。特に泉佐野丘陵緑地づくりでは、地域の皆様、市民の皆様にご尽力頂いていること、重ねて御礼申し上げます。
- ・この泉佐野丘陵緑地は、実はバブル前に泉佐野丘陵コスモポリスをつくろうという壮大な計画があり、用地を買いましたが、バブルが弾けて利用されず大阪の負の遺産と言われていました。そこで、この土地を活用しようと公園の計画が決まりました。しかし、当時、行政が公園づくりをするとしても財源がないという課題を抱えていました。この公園では他の公園と違うことをしようという先生に知恵を頂き、企業グループ「大輪会」のご支援やパーククラブの皆様にご協力いただき、現状の形になりました。泉佐野丘陵緑地のように自然を活かした公園は、皆様の力でじっくりと育てていきたいと思っております。
- ・それと「笑働 OSAKA」という笑顔でありがとうと素直に言えるような取り組みを大阪府が進めています。「笑働 OSAKA」、感謝と笑顔が自然にひろがっていっぱいのお大阪を目指したいと思います。
- ・今日のフォーラムが盛会になりますこと、また泉佐野だけではなくて、大阪全体がこういかたちで笑顔の美しい大阪にしたいと思いますのでよろしくお願いします。



基調講演



「新しい公共、泉佐野丘陵緑地での挑戦」

増田 昇 氏（大阪府立大学大学院教授）



<公園の意義と大阪府の計画>

- ・今日は「泉佐野丘陵緑地での挑戦」というタイトルを書いています。今までの公園づくりではない、新しい公園の作り方というのをみんなで模索しましょう、挑戦しましょうとスタートとしたというのがこの公園です。これからそのことについてお話をしたいと思います。
- ・公園には、使わなくてもそこに在るだけで大きな意味を発揮しているという「存在効果」、いろんな意味で使った上で効果を発揮してくる「利用効果」、公園そのものが目的ではなくて、公園を使うことが地域づくりにつながる「媒体効果」があります。
- ・大阪府が考えているみどりの戦略として、公園だけではなくて、公園に付帯・付属しているとか、道路に面した民有地を活用しながら緑を醸成していこうという「緑の大阪推進計画」があります。

- ・公園というのは、そもそも自然の持っている魅力性とこの公園をどうやって使いこなしていこうかと、参加していこうかというソフトの仕組みの3つが組み合わさって良い公園ができています。

< 泉佐野丘陵緑地について >

- ・空港連絡道に上之郷 IC がありますが、上之郷 IC の西側の麓に泉佐野丘陵緑地があります。周辺には、室町時代に九条家の荘園として形成された日根荘というのが広がっています。そこに面する山麓部には雨の神様として知られている意賀美神社や日根神社等の歴史も保有しています。
- ・また、参画型社会といわれるなか、これだけ寿命が延びていくと、自己実現の場を公園に求めつつ、さらに参画型社会という市民が市民にサービスをしていくという時代が来たという社会的な背景を鑑みて公園をつくっていく必要があります。
- ・公園の特徴は4つあります。ひとつは、どう風景を再構成していくのかという景観を重視すること。もう1つは当然、自然にも優しく、人間にも優しくという、環境に配慮すること。さらにこれからの公園の作り方として、みんなでシナリオのような物を作って考えながら作っていく、あるいは作る段階からみんなが参画できるという、シナリオ型の公園づくり。さらに公園を媒介として泉佐野全体が、あるいは、大阪府全体が活性化していくこと。この4点を目指して、この公園づくりをしてきました。
- ・シナリオ型を実現するために、いろんなことを考えました。公園は西、中、東に分かれています。中地区からスタートしました。公園を利用しようと思うと、やはり最低限のハードが必要です。車のアクセスや皆さんが活動するためのパークセンター的な拠点などです。そういう施設整備は府の方々に任せして展開をしていきたいと思います。もう一つは、コラボレーション区域という形で大輪会の支援を受けながら、府民と行政とが手づくりで公園を作っていきたいというエリアを設定しました。
- ・自然に関わっていく時には、活動、保存、保全の3つの考え方を持って関わっていくことがいわれております。
- ・1990年代のアメリカの生態学会がアダプティブ・マネジメントという形で提唱した考え方があります。まだまだ自然を再生していくときに分からないことがいっぱいあります。だから計画を立てて、少しでも実施をしてみて、それによって自然にダメージ与えていないか、生物がどういう生息状態になったか、植生にどういった変化があったかを検証しながら実施をしていく、こんな形で公園づくりを展開しています。
- ・徐々に出来るところからということで、昔のように一気に活動を最大化させて活動していくというのではなくて、少しずつ活動を広げていって、最終的には地域に活動を寄与するような公園を展開していきたい。
- ・そのための仕組みとしてもう一つは、パーククラブという府民の方々がマネジメントに参加できる仕組みを作りました。これと同時に運営会議というものをつくって、みんなで議論しながらこれからの公園の作り方を検討し、合意形成しながら進んできたというのがこの泉佐野丘陵緑地の状況です。
- ・来年度に向かって、ここは畑をちょっと広くしましょうかとか、ここのハンノキは保全したいですねとか。ここのミナミを整備するには、もうちょっと作業しないといけないとか、こんな事を議論しながら展開して言っているところです。まさに今までの公共事業にはない、「新たな公」というか、産官学民が議論しながら、つくる段階から協力し、作り上げてからも作り続けていくというのが新たな挑戦をしているということです。



「みんなでつくろう！公園の新しい「かたち」

～泉佐野丘陵緑地公園事業の紹介～

窪田 誠 氏(大阪府岸和田土木事務所 所長)



- ・私の方からは、「泉佐野丘陵緑地の整備の状況」と、「大輪会さまから頂いている支援制度について」、この2点ご紹介させていただきます。
- ・リーディング区域では、民活区域の進出企業と共有することになります。9 メートルの道路を整備しています。次に斜面近くの棚田の復元、元の地形をできるだけ活かしながら、レンゲや菜の花の作付けで整備を考えています。
- ・林の駐車場はアスファルトではなく、芝生舗装にするなど景観に配慮したものにしています。次に拠点施設となるパークセンターは、現在運営会議で設計検討をしています。この写真はパークセンターの予定地からの眺望です。りんくうゲートタワービルや関西国際空港が見えます。パークセンターは、パークセンター棟、研修棟、車庫の三棟で構成し、建築面積は500 平米です。周囲には桜など花木や、榎木など植栽の生える緩やかな斜面の芝生広場を整備する予定です。またパークセンターには、トイレや休憩スペース管理事務所の他、パーククラブ専用のボランティアルームを設置します。また建物の北側には、先ほどの景色を楽しんで頂けるように、デッキを設置します。
- ・左上の写真は泉佐野市上之郷にあった旧向井家住宅です。パークセンターのデザインは、このような泉佐野市に古くからある農家の佇まいをイメージしています。パークセンター棟の屋根は草葺になっています。研修棟、車庫の屋上には太陽光パネルを設置するなど環境にも配慮しています。
- ・次にコラボレーション区域の紹介をさせていただきます。上の写真は、向井池のあるコラボレーション区域の様子です。水辺の落ち着きある空間で、多彩な水辺風景を楽しむことが出来ます。
- ・ササユリが生えておりまして、6 月くらいに咲きます。
- ・このように竹林の悪影響には大変悩まされていますが、一方では竹林の恵みといったものもあります。この写真は昨年6 月7日に開催いたしましたタケノコ掘りイベントの様子です。大輪会のみなさんや一般のみなさん64 名に参加していただきまして、この日の昼食は泉佐野丘陵緑地山のタケノコ入りカレーをみなさんに食べて頂きました。また食事の後にはパーククラブの皆さんの案内で園内のツアーを開催していただきました。
- ・次に企業グループ大輪会さまからの支援についてご紹介させていただきます。企業グループ大輪会さまは、国際花と緑の博覧会への参加を目的として昭和 62 年に設立された企業グループで、現在 53 の企業で構成されております。大輪会さまには、泉佐野公園丘陵緑地にはじまる新たな公園づくりの趣旨にご賛同を頂きまして平成 20 年 6 月 30 日に大阪府と事業支援に関する確認書を締結して頂きました。
- ・ご支援の内容は、概ね 10 年の間に 2 億円相当の資材等を提供して頂くというものでございます。支援の内容は大きく分けて3 つあります。一つは、人づくり支援です。二つは、公園づくり支援です。これは公園づくりの為の資材の支援です。三つは地域づくり支援です。これは地域の活性化に役立つ公園づくりという泉佐野丘陵緑地の基本理念を実現するための支援です。
- ・人づくり支援としましては、ボランティアの皆さんに知識や技術を習得して頂くため、パークレンジャー養成講座を平成 21 年度から開講しております。講座は、全 11 回開催しており、大阪府立大学の増田先生を初め、各分野の専門

家やパーククラブのメンバーに講師を務めて頂いております。

- ・公園づくりの支援といたしましては、ホイールローダーや、振動ローダー、竹を細かく砕くパワーチップパーや、短時間で炭が焼ける高速炭化炉など多様な資材を支援して頂いております。
- ・また、大輪会の会員企業の皆様からも個別にご寄付を頂いており、大変ありがたく思っております。
- ・地域づくり支援ですが、岸和田土木事務所、私どものところですが、年間約 5 万株の花苗を育てております。そのための資材を提供して頂いております。育てた花苗は各土木事務所を通じまして府内各地の家族団体さんに提供させて頂き、地域のまちづくりに役立てて頂いております。関西国際空港ターミナルビルや、各地のイベント会場などへも提供して頂いております。大阪市さんとの連携事業も行っております。京阪電車の大江橋付近や、南海電車の難波駅前などの大阪市が管理している花壇に花苗を提供しております。

事例紹介 2



「パーククラブ活動状況について：郷の便り」

殿元 日出夫 氏（泉佐野丘陵緑地パーククラブ 会長）

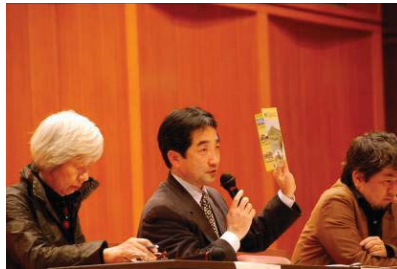


- ・まず我々パーククラブ活動の活動方針ですが、ハードルは高くありません。「月1回以上参加しよう」「情報の共有をしよう」「明るく楽しく安全第一に活動しよう」この三つであります。そして現在の活動日ですが、月四回、第1日曜日、第2水曜日、第三土曜日、第四木曜日と、四回にばらけて、なるべく多くの方が活動されるようにしております。
- ・昨年度統計を取りますと、公園の整備作業が 20%、各種調査が 23% 会議等が 33%、イベント等が 24%と実に栄養のバランスがとれております。
- ・公園整備作業(その1)は、竹の整備でございます。竹に始まり、竹に終わるといっても過言ではありません。竹林の整備が終わった後も使えるような竹は残して、工作用、竹樽、樹名板等に使っております。あとは、パワーチップパーにかけて平らなところに敷き詰めております。
- ・続いて公園整備作業(その2)としては、タケノコ除去。雑草も芽生えて、タケノコ掘りのイベントで皆さんにたくさん掘って頂きましたけれども、雨後のタケノコのごとく、竹がどんどん生長していきます。残すところは残しますが、後は伐採します。
- ・公園整備作業(その3)。笹切り。毎年 5 月から8月に掛けまして、もと竹藪だったところに、笹がどんどん生えてきております。10 日に一回くらい切らないとだめなんです。
- ・次に 23%を占めます調査活動(その1)の山菜調査。計 23 種を発見。ワラビ、ゼンマイ、タラの芽、美味しい山菜が沢山ございました。続いて、大阪府からの協力を得て、水性動物調査。絶滅危惧種のナニワトンボも発見されました。
- ・調査活動(その2)の野鳥調査。この近辺では 20 種類くらい野鳥が発見されますが、われわれ泉佐野丘陵緑地では 11 種発見されました。続いて、ササユリ調査。ササユリは本日も参加されておられます泉佐野市長の、泉佐野市の

花でございます。合計 200 本以上発見されております。

- ・続いて、調査活動(その3)の果実調査。これはおいしい調査でございます。ここにありますが、スモモ、びわ、ヤマモモ。
- ・そして地味ながら大事なのが植生調査、大径木調査、キノコ調査。キノコも五十数種が発見され、半分の二十数種が名前も分かっておりました。
- ・続いて、会議、勉強会と 33%。民主主義的に物事を進め、ボランティア精神を発揮して貰う為に必要な時間だと考えております。いろんな形の会議がありますがけれどもこのパーククラブ会議というのは、パークレンジャー全員が参加する会議でございますけれども、喧々がくがくとした会議です。
- ・続いて 23%を締めますイベント。5 月に行われたタケノコ掘とタケノコカレーのイベントでございます。総勢 109 名、大勢の方が集まって頂きましたし、震災の後でございましたし、東北大震災の後でございましたので、義援金も 44000 円集めさせて頂いて、りそな銀行の窓口を通して頂いて送付させていただきました。防災フィールドワークキャラバンや泉州芋煮会も開催しました。そして視察と協働。6 月に大阪阪南市の海辺の森、里海公園 11 月に川辺いきものの森、滋賀県の東近江に行きました。
- ・最後に今後の方向性ですけれども、3期生との融合、専門部会の立ち上げ、NPO 法人化に向けての検討、公園のゾーニングとさらなる検討ということを目指しております。現在のゾーニング状況ですが、ネズミ色、灰色の検討地域等、まだ分からないことがたくさんあります。今後検討して、活用地区、保全地区、保存地区に区分していきたいと思っております。そして、われわれの目標ですが、善行は報償を求めずという形をベースにしまして、「憩いと潤いある公園を残す」、「新しい仕組みのボランティア組織を残す」、「後世に伝える記録を残す」の 3 つのことをわれわれは今後に残していきたいと思っております。

パネルディスカッション



増田氏

では、後半戦進めていきます。まずはパネラーの方々から公園の可能性について伺いたいです。

清野氏

私は、シナリオ型の公園であるということにとってもわくわくしました。そのポイントは3つあります。1つは造園、都市計画、植物、市民活動の大変優れた専門家集団が運営委員になられたという点。もう1つは泉佐野丘陵緑地のコンセプトにある「新しい公共」という点。市民を育てることから始めたことが大変大きな魅力だと思います。それともう 1 つ、大輪会という大変強力な支援がある点です。これは対等な行政と市民とのパートナーシップを育てていく上で、大きな力になっていると思います。一般に行政と市民のコラボレーションがなかなか上手くいかない原因の1つは、資金の問題だと思います。この大きな3つの要素があることで、公園の可能性が無限に広がっていくと思います。

澤木氏

資料の中に「尼崎 21 世紀の森づくり」関係のパンフレットの3種類と有馬富士公園とのパンフレットがございます。こちらの尼崎21世紀の森づくりというのは尼崎市のある地域を新しく活性化していこうと始まった活動です。それぞれタイプは違うかたちで進んできています。どちらも今日のテーマである「新しい公共」をどういう形でつくっていくか、既存のボランティア団体と協力しながら進めるということで、模索しながら進んで参りました。

忽那氏

コミュニティの場所の在り方、活動の仕方を考える時、うまく行くことを前提にした今までのような行政主導のまちづくりに成功の秘訣は全くないと思います。私は、関係する人を増やしていくことを非常に重要にしたいと思っています。パンフレットに水都大阪フェスのことが載っています。これはいろんな方の「やってみたいこと」を実現するというテーマで企画しました。去年は企業が参加してコミュニティサイクルの自転車を貸し、船に乗って、飲み屋をはしごするもの、東北地方で被災されて結婚式できなかった人の結婚式などです。この活動が公園の周りにも広がっていくような仕組みづくりが、これから必要と思います。

増田氏

1つは活動を継続していくときに内からのエネルギーと外からの刺激や支援、2つで展開していきますが、内からのエネルギーは後から議論するとして、外からの支援、刺激について議論していきたいと思います。それぞれの立場から伺いたいと思います。

小河氏

公共的な施設は演劇でいえば舞台ですが、基本的にはその上で活躍する主役は市民です。それを支えるのは我々行政です。今まで、行政が専門家と供給者側の論理でたくさん施設をつくってきました。今度は利用者の論理に変えなければいけないと感じます。いろいろなものをつくっていく喜びを見いだしていく利用者側の論理、仕組みがこれから重要です。

増田氏

内なるエネルギーと外部からの刺激という、クリエイションの刺激としての専門家というなかで、お三方いかがですか。どんな関わり方を専門家として考えられるのかを教えてください。

清野氏

この公園においても運営会議をすると、「シナリオ型」と言っているが行政の方が引っ張っていこうとされることがあった。そうすると専門家の方が委員としていらっしゃって非常に厳しいチェックが何度も入ります。すると、行政の方が次回の会議に全く違うものを出してくる。前の会議のものをきちんと受け止めた物が提案される。その繰り返しが何度かありました。その柔軟性はとても素晴らしいと思いました。

澤木氏

泉佐野丘陵緑地はシナリオ型でつくっていくための仕組みが必要です。1つはパーククラブが実際に植物の調査、保全をされていますので、専門知識をもった人(大阪府立大や大阪市立の自然史博物館など)のサポートが大事です。もう 1 つは利用者ではない泉佐野丘陵緑地周辺の地域の方々とパーククラブの人、利用者がどういう関係をつくっていくかというのが問題になってきます。

忽那氏

行政は設計するだけで終わるのではなくて、設計した後、例えば、企業にサービス性を上げていって資源が回収できるのかアイデアを求めていくとか、人材の登用の仕方を仕組み化するのを行政の方をお願いしたい。そのアイデアを公園以外のところに広げていくといくらでも資源（高速道路、閑空など）があります。そんな中でビジネスモデルが生まれてくるということもあるだろうし、新しい風を送り込んでくれる若い人がくるかもしれない。若い人や女の人が増えるような、オシャレな格好で来るとか、経過報告ではなくて未来に対して「こうしていきます！」というような、広報的メッセージもあるとおもいます。そういうアイデアを公募していけたらなと思います。

増田氏

殿元さんいかがですか。パーククラブをされていて、外部との関わりというのはどのようにお考えですか。

殿元氏

パーククラブが育ってきたのは、大輪会さんのご支援があったからだと思います。産官学民が協力しあって泉佐野丘陵緑地の中で人と組織を自然が花を咲かせるような活動状況を作っていきたいです。

増田氏

小河副知事から行政の意見をもっと聞きたいと思います。行政の役回りについてお聞かせいただけますか。

小河氏

今まで行政側の論理で言えば、優秀な行政マンはみんな先に引っ張ってしまう。市民なり参加している人が動きやすいように、組織の問題も相談をしながら行政として動けるところを動く。みんなでプログラムを実行していくのですが、結成するまでが一生懸命ですが結成すると任せきりにしてしまう。これは、ある意味地域の方が育ったという意味ですが、そうではなくて、それぞれの団体には悩みがある。それをちゃんと掴んでそれを支援していく。そういうことが行政のできる協働ではないかと思います。

増田氏

当初、公園づくりはエネルギーも非常にある。これを将来に向けてどう広げていくのかとあるいは、どう持続させていくかというあたりがこういう活動の一番難しいことです。そのあたりについて、今のどう広げていったらいいか、どうあるいはどう持続させていったらいいかについてご意見いかがでしょうか。どちらでも結構です。

忽那氏

商品開発をしているときに、とにかく、ちょっとでも手に取ったものが、買う確立が高まるといわれます。つまり、関われば関わる程、手に取ればとる程、愛着がわくということです。この公園と触れ合うきっかけをつくることができれば僕は思います。今までは我々は設計をやっていました。「作る」という過程というのは、予算が付いて、作って安全性が担保されて、共有化されるという話になりがちですが、最初の部分で自分たちができることはやるという手続きが必要です。発注の形も工夫してかなければいけないと思います。

澤木氏

泉佐野丘陵緑地の養成講座は毎年 30 人くらいの方々が加わっていきます。この右肩上がりに成長する仕組みをどう維持していくのかということを世代交代と合わせて考えていかなければならないと思います。泉佐野丘陵緑地は、今は未開園であるため調査をしたり整備をしたりというのがありましたが、開園後は、利用の方がどんどん増えていきます。パーククラブに求められる機能・役割が変わってくると思います。例えば、市民主体的に運営できるノウハウとか、養成講座で学んだことではなくて実践しながら学んでいくことや、それを下の世代に伝えていながら、パーククラブが変

身しながら裾野を広げて行かなければ行けない。それがうまくいくといろんな地域との関係とかいろんなチャンネルが広がっていった、よい公園になっていくと思います。

増田氏

殿元さんは組織についてどのようにお考えですか。

殿元氏

パーククラブに参加されている方は、このパーククラブだけではなくて、二重、三重のボランティアをされているわけです。だからどっちを重点におくかということで、役職についているところに重点を置いているみたいです。だから出席率をみていますと、やはり役員の方々の出席率が一番高いという感じになっています。そこで、みんなが何かの役を持つということが必要だと考えています。また、単に作業員的に集まったのではなく、勉強して自分自身の知識とか経験とか、経験値が上がっているという気がもてるような活動状況にしていく必要性があります。多様な側面からバランスをとりながら、できるだけ全員参加のボランティア組織を目指して運営していきたいと思います。

清野氏

ちょっと視点が違うかもしれませんが、私はとても孤独社会の新聞社に働いていて、二人の子供を育てながらがんばって働いてきた世代です。家庭と仕事の両立ということをやってきましたが、実は、家庭と仕事の両立だけでは自分がどんどん貧しくなっていく。やっとそのことに気がついて第三の空間が必要だと言うことに気がつきました。まさパーククラブというのは、まさに第三の空間だと思います。家庭でもない、仕事でもない、親戚でもない。その空間において、先程会長が、「会長になって育っているな」と感じますとおっしゃっていましたが、まさに自分自身が育っているなという感覚を持てるということは、凄いいことだと思います。そういうメッセージをもっと市民の側に発信できればと思います。ボランティアということだけではなくて、おそらく、3.11以降日本人の価値観が大きく変わっていると思います。本当に人間らしく生きていく為に、自分にとって何が必要なのかということを考えたときに、なにが自分を豊かに出来る空間なのかということが大事だと思います。そういう意味で私はパーククラブの可能性というのはものすごく大きいと感じます。

小河氏

私自身は、公園にあるハンモックに乗って、「ぼーっ」としたときの感覚が忘れられない。今の社会はパソコン開いてマウスをもって忙しそうに仕事しても、何も考えていない。何か思い浮かんで何か考えてやるということがない。与えられる課題に対して考える。そうやって感じるということがものすごく少ない。そういう事考えられる時間がこの公園にあればよいと思います。

あと公園は広いです。これはどんどん可能性がある。パーククラブさんに入ってもらっていますが、これから地域の人にどんどん入ってきてもらいたい。いろんな活動して欲しい。そういうときに若い世代、高校生や大学生、大学生のクラブ活動というところが公園に入ってきてくれることを願っています。それができれば、学生さんたちも自然の感性が養われるし、またパーククラブも変わっていくと、そういうことを考えています。

忽那氏

大学生なんかと話していると、いまこの水都大阪の話でも、ほんとに僕たちも勉強になる、ぼくらの若いときそういうこと思ったことなかったのですが、社会をよくするために何が出来るか、自分が何かお返しできるかとかいうことを考えているのですね。そういう人達が関わるきっかけが無かったり、どういう風にアクションしていけばいいか分からなかったりする場合、その通路を作っていけたらよいと思います。

澤木氏

有馬富士公園の夢プログラムのきっかけは、三田市の市政 40 周年の年に、記念式典、セレモニーの代わりに、市民から手を挙げて貰う形で、40 周年を祝うのなら何でもよいと言う形で市民からイベントを公募したことです。そんなことしてくれる人いるんだろうかと思っていながら公募したら、68 のプログラムが集まりました。4 月から 12 月くらいまでの期間で、延べ 2000～3000 人の方が参加されました。記念式典をやって数百人出るものと全然効果が違う。それだけの市民のパワーは大きく、いろんなイベント事をやりたい人がいるんだと思いました。それが街角夢イベントといいまして、夢がここに夢プログラムに引き継がれています。そういう意味で泉佐野緑地周辺も、泉州に限らず大阪府民を含めて、いろんな形で参画の可能性があると思います。

増田氏

パーククラブだけでやろうとするとある一定の限界があるから、いろんな所からアイデアをいかに持ち込むというのは大事かもしれませんね。それを受け入れるだけの余裕をパーククラブがもつといいですね。

殿元氏

そうですね。外部の刺激と新鮮な形で接していくというのは大事だと思います。やはり、同じ形のリーダーが続けていて、同じ形の専門家がおって、同じ形でやっていけば、いずれマンネリ化などが起こってくると思います。夢プログラムのような形でパーククラブができれば、そのかたちもできてくると考えています。いろんな外部の方とコラボレーションは素晴らしいと思います。

増田氏

今後、泉佐野丘陵緑地がどう地域に入っていくのかと言うことがとても大事という話になります。地域とどのようにつながったらいいでしょうか。

殿元氏

まだ公園自体がオープンしていないので、地域の方々と一緒に労働作業はしておりません。年に二回、春のタケノコ掘りイベント、秋の泉州芋煮会の時だけが大輪会の皆様と一般市民の方々が、公園に来られて、公園を散策される状況ということです。夏休みや春休みには、上之郷の小学校あたりには、声を掛けて虫取りとか、セミ取りとかというアイデアは出ていますが、まだ実現には至っていません。

忽那氏

こういう里山とか里地とか、そこで何が採れて、何が食べられるとか、そういうことをほんとに聞きたいと思っておられる海外の方は非常にいます。海外の方に対してステレオタイプ型の観光ではない、地域密着型の観光ニーズにマッチングさせると、この公園はとても注目される場所になると感じています。それと、投資したこととが、回収できるという機能からいうと収益を管理回すとか投資効果を判断できるようになってきたら、自分たちのノウハウを使いながら、社会貢献型ビジネスモデルと構築できる。そんなアイデアを問うことができるいいなと思います。

澤木氏

二つくらいの視点があるかと思います。一つは有馬富士公園で行われているような夢プログラムのような、外の人達が参画できる仕組みを作るモデルを作るといいとおもいます。ただ、仕組みの中で何でも自由にしたらいいかというところではなくて、泉佐野丘陵緑地のあり方に合ったものとかいろいろな条件がつくのですが、そういうものをしっかりと公平に協議できる場をつくる仕組みを含んだ仕組みを作っていくことが重要だと思います。

もう一つは、いろんなところに声かけをして、一緒にいろんなイベントなどをやって行く活動をやっていくようなやり方です。みんなで一緒に企画していくと、いろんなつながりができてきます。そういう仕組みをもう一つやって行ったらいい

かなと思います。

清野氏

地域の方に自分たちの里山である泉佐野丘陵緑地をもっと知って頂くということがとても大事だと思います。私が現地に行かせて頂いたときに、竹藪がほんとに浸食してくる、その中で、一番太い木だった山桜が一本立っている。あれを見たとき感動しました。その風景は、里山は人間の手が離れるとこうなってしまう、自然はこんなふうには生きています、本当に沢山のことを教えてくれました。まさに地元の人達にとっても里山の文化の魅力、山辺の文化をひしひしと感じら貰う機会があればいいなと思います。

澤木氏

道路にしろ、河川にしろ、公園にしろ、いわゆる公共施設は、もとは市民のものでした。ただ、危ないことをされては困るということで、管理を行政がしているんです。泉佐野丘陵緑地はもともとは市民の里山なので、その辺はみんなで知恵を出せばどんどんいろんな人が入ってもらい、入ってもらえば良さが出てくる。そういう仕掛けをやって行ければと思います。

増田氏

最後に、この丘陵緑地をどう具体的に展開していったらいいかというのを一言ずつ、夢を語って頂きたいと思います。

殿元氏

少子高齢化、人口減少と言われていますが、団塊の世代結構元気なお年寄りがたくさんいます。元気なお年寄りが孫達をつれて遊びにできれば、ゲームもパソコンとか関係なくて、虫と気候とか樹木とか動物とか、いうところで勝負が出来ると思います。すると、おじいさんのおばあさんがゲームなどを子供に教えて貰うのではなくて、おじいちゃんおばあちゃんが教えてあげる。という場になって来れば、パーククラブが目指す市民にとっての憩いと潤いの場になって来ると言う形で考えております。

忽那氏

私は外を使いこなす達人を紹介するコンセプトで「osoto」という雑誌をつくっています。街の使いこなし、公園の使いこなしという言い方で、とてもこだわって活動もしている方がおられます。中には既存の枠にとらわれないで活動されている方がいます。その方々の思いを共有できると、「できない」と勝手に思い込んでいることができる場合があります。いろんな活動を集めてきて、支え合うような仕組みをこの泉佐野丘陵緑地につくれたらいいなと思っています。もう一つだけ。今日はいろんな団体が展示されていますが、何かのイベントがあるときに府内の公園ボランティアが協力できるような体制を築けるとよいと思います。労働力というか自分たちの社会に対して使った時間を交換する、そういうことができれば、相乗効果的に人の関係も関わる人達も増えていくことが可能なかなと思います。そういう拠点に新しい拠点を 21 世紀的につくっているの、なって頂ければ嬉しいなと思います。

澤木氏

一点は、他の森づくりをされる市民の方とパーククラブの方が交流されたり、意識を共有されたりするのが、非常にいいなと思います。もう一つが、市民活動の鉄則として、背伸びすると疲れますというのがあります。やはり、自分たちのペースで活動していかないと長続きしない。もう一つがこれは行政の方をお願いしたいのが、先ほどの殿元さんのスライドなんかを見ていると市民側は新しい公共という者に対する認識をどんどんお持ちになってきていると思います。行政の方は 3 年ぐらいで担当が変わっていきます。そうすると同じ思いを共有できないことが多々あります。行政の人も新しい公共に参画しているという意識でずっとパートナーとして関わって欲しいとそれを痛感しております。

清野氏

私はずっとドーンセンターの館長をしてしましたが、ドーンセンターは、全国の男女共同参画推進センターのなかでも日本一というほどのブランドを持っています。1994年にドーンセンターを作るときに、市民の人達の思いをほんとに細かく聞いて設計の所に反映させし。それと当時先進的に活躍されていた3人の女性をコーディネーターに招いて、彼女たちに事業を任せました。官と民がコラボレーションをしてドーンセンターをやってきて、それが全国の他のセンターには無いブランドとして全国に通用しています。私は、この泉佐野丘陵緑地も日本だけではなく、世界に通じるブランドになって頂きたいと思います。新しい公園づくりについては、「泉佐野丘陵緑地に学べ」と言われるようになって頂きたいと思っております。

増田氏

少しだけコーディネーターの役目として、まとめをさせて貰います。今日は、「産官学民の協働」あるいは、「新しい公共」というのが一つのテーマになっておりました。最近、よく市民と行政の共生とか協働という言葉をよく聞きます。共生になっていこうとすると、お互いがお互いに機能、役割が違うということの違いを認め合わないで役割というのは出来ないですね。アリとアブラムシ、アリは歩行能力が高いが密を集める能力はない。アブラムシは密を集める能力は非常に高いけれども移動能力が高くはない。おたがいが無いものを補完し合って共生関係が出来ている。違いを認めているわけですね、このような関係の中でパーククラブの運営も、共通の価値観に向かってお互いの違いを認めながら、いろんな役割をみんなが担っていくことが協働であると感じました。

もう一つは共生関係をしていく中で、お互い違いを認め合いながら、主従関係ではなくて対等な関係性、公平性をどう担保のすることが協働の広がり非常に高めていくということです。このあたりの公平性をなんらかの形で担保する仕組みとして、協議会であったり、審査会であったり、運営会議であったり話が端々に出てきましたが、このあたりの公平性を担保するあるいは、お互いのフラットな関係のなかで議論できる形で展開していくかということが今日、共生や協働の話の中で生まれていったのではないかと思います。

その次の段階として、次にどう使いこなしていったらいいのか。あるいは、どう活動を展開していったらいいのかという話の中で、途中、かなりクリエイティブな発想をしないといけないですね。いままでの公園法の中で規制的枠組みとかですね。いわゆる規制緩和とはまさにそういうことなんですね。規制緩和は秩序をなくしますよというのではなくて、いかにクリエイティブシンキング、いかに創造的な発想を高めていくかということが非常に重要です。やってはいけないことを共有するのではなくて、やりたいことを共有して、やりたいことをいかに実現するかと言うことをみなで考えていきましょうという点です。

もう一点は、成熟型社会の中で、今まで早いことや巨大な事が良い時代でしたが、どうも参加型の中での展開していく、あるいは自然にやさしく展開していこうとすると時間という概念をきっちり踏まえながら展開していく必要があります。

最後は、あくまでも公園とか緑地とか環境というのは地域に根ざした環境資源ですから、いかに地域との連携、あるいは関わりをどう深めていけるのかが重要な点です。そのあたりを展開することで、持続性をもった公園に展開し、地域に貢献できる公園になっていけるのではないかと思います。そのあたり今日皆様方から頂いた議論を融和的にまとめてみますとそんなところかなと思います。





産経新聞より

(2012年1月31日)

計画から府民が関わる公園づくり

企業と住民、行政が一体となって進めている府の公園整備事業をテーマにしたフォーラム「新しい公園づくり」が2月4日午後2時から、大阪市中央区のりそな銀行大阪本社ビル・講堂で開かれる。参加無料。府が泉佐野市に所有している工業団地建設用地を公園（泉佐野丘陵緑地）として整備するに際し、計画段階から府民が関わる「シナリオ型の公園づくり」に取り組み、約3年が経過。現状や取り組みの意義を考えるねらいでフォーラムを開催する。

来月4日にフォーラム

日本造園学会長を務める増田昇・府立大学大学院生命環境科学研究科教授（緑地計画学）が講演するほか、増田教授ら5人の専門家が討論を行う。また、府内各地の府営公園で管理に携わるボランティアグループの活動を紹介するパネル展示や、府営公園で栽培したハーブティーの試飲コーナーなども設けられる。定員100人で先着順。参加者には府営公園で育てた花の苗をプレゼントする。申し込みなどの問い合わせは府公園課（☎06・6944・9314）。

「泉佐野丘陵緑地」府民・企業・行政スクラム

府民と企業、行政が一体となって取り組む「新しい公園づくり」をテーマにした「泉佐野丘陵緑地フォーラム」が4日、大阪市中央区のりそな銀行大阪本社ビル・講堂で開かれ、澤木昌典・大阪大学大学院教授やランドスケープデザイナーの忽那裕樹さんらが意見を交わした。

フォーラム開く

「泉佐野丘陵緑地（仮称）」は泉佐野市上之郷の標高40～100mの丘陵部で面積約74・5ha。和泉葛城山系のふもとに位置し、景観が美しい。

環境に配慮しながら地域の活性化にも寄与する府営公園を目指している。府公園課は府民、企業も参画する全国初の「シナリオ型の公園づくり」を打ち出し、注目された。企業からは2億円相当の資材・機材が支援される。

府民は公園づくりボランティア「パーククラブ」のメンバーとして計画に参加する。現場での安全確保、公園づくりに必要な知識や

「シナリオ型」新公園づくり

技術などを養成講座で学び、既に現地で整備作業や調査活動を行っている。

日本造園学会会長を務める府立大学大学院の増田昇教授は「まず森を知るための探索路をつくってじっくり考え、そこから森の整備をしていくという仕組みがシナリオ型公園づくりの特徴」と説明し、里山などの例をあげ、最初から人がかかわることの重要性を強調した。



基調講演する増田教授

産経新聞より

(2012年2月5日)